

# Moggallānavyākaraṇa I. 1

—ě ē, ǒ ō について—

片 山 一 良

西暦十二世紀後半、セイロンの Moggallāna によつて著わされた *Mog(gallānavyākaraṇa)* は、*Kac(cāyanapakaraṇa)* に比べると、時期的に見ても当然のことであるが、梵語文法の影響が極めて大きく、特に *Cādravyākaraṇa* に一致する *sutta (sūtra)* が多い<sup>1)</sup>。しかし従來のパーリ語文法を全く脱したのではなく、termini 等については *Kac* のそれをかなり踏襲していると言つてよい。

この文法の最も特徴ある *sutta* の一として、「*a-ādayo titāliṣa vaṇṇā*」(*Mog. I. 1*) が挙げられる。ここにはそれ以前の文法、例えば *Kac*, *Nyāsa*, *Kālika* などと異り、二の短母音が加えられて十母音、即ち *aā*, *iī*, *uū*, *ě ē*, *ǒ ō* が示されている。これは、一般に長母音と見做される *e*, *o* を短長二種の母音に区分したもので、梵語文法にも見られない独自の解釈であるが、後世、*Mog* 派以外には広く支持を得ることが出来なかつたようである。その原因は何処にあつたのか。本稿はこれを *ě ē*, *ǒ ō* 設定の意味と共に、若干、考察しようとするものである。

*I Mog* には何故、*e*, *o* を短長に区別したかが説明されていないが、*Mog* 派に属する *Moggallānapañcikāpradīpa*<sup>2)</sup>、及び *Vutti(vivarāṇa)p(añcika)*<sup>3)</sup>によつてその大凡を窺うことが出来る。後者によれば、次の通りである。

「*Kaccāyana* によつて『*a* 音を初めとして四十一〔音〕がある<sup>4)</sup>』と定義されているが、それは適切ではない。何故ならば、パーリ語 (*Māgadhikābhāṣā*) には短音 (*rassa*) の *ě*, *ǒ* 音を含めて四十三音があるからである。つまり、それら [*ě*, *ǒ*] は *seyyo*, *sotthi* 等の例に見られるからだ。*Kaccāyana* は梵語に従つて、*e*, *o* は長音 (*digha*) のみであると考え、そのように定義したのだと知らねばならない。又、或る者は『複合子音 (*saṃyoga*) の前にある *e* 音、*o* 音は、しばしば短音のように発音される。例えば *eṭṭha*, *seyyo*, *oṭṭho*,

1) O. Franke: *Moggallāna's saddalakkhaṇa und das Cādravyākaraṇa* (JPTS, 1902-1903, pp. 70-95)

2) Totagamuvē Śrī Rāhula: C°, pp. 14<sup>9</sup>~22<sup>17</sup>.

3) B°, with *Mog.* and *Mog-vutti*, p. 39<sup>12-24</sup>.

4) 「*akkharāpādayo ekacattāliṣaṃ*」(*Kac. 2*).

sotthi である<sup>5)</sup>』と言っているが、これも適切ではない。何故ならば、長音には短音のよ<sup>5</sup>うな発音が生じることがなく、〔音の〕短、長ということは発音時間 (uccāraṇakāla) によつて決定されるものだからである。即ち、発音に於て、時間が短いものは短音のみであり、時間が長いものは長音のみであるから……。」

簡単な説明であるが、ともかくこれによれば短母音 e, o の設定理由は、「e, o いづれにも短、長があり、それは発音時間によつて区別されねばならない」ということにある。

Ⅱ この新しい解釈に対して他はどのように受けとつたのであろうか。特にそれに対する直接の反論は、文献には殆んど残されておらず、筆者の知る限りでは、わずか後世の *Balāv(atara)-ṭ(ika)*<sup>6)</sup> に於て見られるに過ぎない。今ここにその概略を紹介しよう。

「Moggallāna 師等は、e 音、o 音に発音の区別を設けて、或る場合には短い発音が生じることから、二の e 音、o 音に対し、短、長によつて四とし、十母音、三十三子音を考え出して四十三音と説いたのであるが、それは彼等だけの考えであるように思われる。何故ならば、e 音、o 音は *ettha, oṭṭho, seyyo, sotthi* 等に於ては、複合子音の前で短音のように発音されるが、どんな場合にもそのように発音されるとは限らないからだ。例えば、“*yagge tvaṃ jāneyyāsi; putto ty āhaṃ mahārāja*” 等に於ても [e, o は] そのまま [長音] として、又 “*pākato mhi jāto*” 等のように母音連声の結合に於ても、複合子音の前で長音の語として発音される。故に、それ [e, o] は、或る場合にだけ短い発音となるのである。又……複合子音の前でも、複合子音の前でなくても、e 音は重 [長] (*garuka*) であり、o 音も同様である。……Kaccāyana 師は『重子音に於ては重 [長] (*garu*) である<sup>7)</sup>』、『長母音も又 [*garu* である]<sup>8)</sup>』という両 *sutta* を以つてその意味を満たした。*Saddantī* 文法に於ても『a を初めとして四十一音がある<sup>9)</sup>』と説かれている。梵語の〔文法〕書に於ても、e 音、o 音には短音の発音が存しない。それ故に、Moggallāna 師の〔説く〕四十三音はどのような場合にも満たされているとは言えない。Kaccāyana 師によつて説かれた四十一音のみが〔あらゆる場合に〕満たされているのである……。」

以上の所論は我々を首肯させるものであるが、必ずしもこれで充分とは言えない。

5) *Rāp(asiddhi)* § 5 (B<sup>o</sup>, p. 4<sup>22-24</sup>); *Sad(dantī)* § 22 (E<sup>o</sup>, p. 608<sup>19-20</sup>)

6) H. Sumaṅgala: C<sup>o</sup>, pp. 5<sup>14</sup>~6<sup>12</sup>.

7) 「*dumhi garu*」(Kac. 604)

8) 「*ḍigho ca*」(Kac. 605)

9) 「*appabhutekatālisa saddā vaṇṇā*」(B<sup>o</sup>, E<sup>o</sup>, Sad. § 1)

Ⅲ これより ē, ö 設定の意味について考えてみよう。本来長母音である e, o に短母音をも認めたことは、発音上、確かに整理されたように見られるかも知れない。しかし問題は、どのようにして e, o の短長を区別するかである。

Mog 等の説明の中には、それが示されておらず、例がわずかに挙げられているに過ぎない。又、我々も残念ながらその明確な基準を知らない。恐らく Mog 等の言う短母音 ē, ö は複合子音の前に於て認められると理解すべきかと思われるが、それならば Bālav-ṭ の指摘に対して如何に答えるのか。ettha, oṭṭho 等については ē, ö として説明し得ても<sup>10)</sup>、語と語との間に於ける yagghe tvaṃ~, putto ty āhaṃ~, pākato mhi~ 等の ē, ö については例外として扱わねばならないであろう。事実、Vutti-p の説明に於て Rūp. § 5, Sad. § 22 を引用しながら、その各々の後半即ち「“しばしば” というのは mañ ce tvaṃ nikhaṇaṃ vane; putto ty āhaṃ mahārāja [のように e, o が長音の儘で発音される場合もあるからである]<sup>11)</sup>」という箇所を除いている。これは、自説の限界を自ら認めるものであろう。ここに我々は Mog 等の説を次のようにおさえることが出来るのではないかと思う。即ち、Mog 等の説は「一音節 (Silbe) の長さは一音長 (Mora) 或は二音長であり、三音長以上にはならない」という所謂「音長の法則 (Morengesatz)<sup>12)</sup>」を踏まえているのであるが、ここにはその場合に於ける

10) [e, o+複合子音] の例を、これ迄に調べた範囲で、ここに参考として掲げれば、次の通りである。但し、ここでは一例につき一語を挙げるに止め、又、\*印を付したものは、Prākṛit 等からの類推語である。

e+複合子音: kk (pāṭiyekka), kkh (ajjhupekkhati), gg (pheggu)/ cc (avecca), cch (acchecchi), jj (acchejji), jjh (advejja)/ ṭṭh (jetṭha), ḍḍ (deḍḍubha), ṇḍ (deṇḍima), ṇh (Veṇhu)/ tt (ettaka), tth (ettha), ty (petyā), tv (jetvā), dd (\*eddisa), ddh (\*geddha)/ pp (cheppā), bbh (dobbha), mm (\*pemma), mh (semha)/ yya (acinteyya), ll (paṭivellati), sm (bhesma), ss (hēssati)

o+複合子音: kk (okkanti), kkh (okkhitta), gg (yogga), gy (ārogya), ṅkh (poṅka)/ cc (\*gaḷocci), cch (abbhocchinna), jja (pāmojjha), jjh (ayojja), ṅc (koṅca), ṅñ (aññoṅña)/ ṭṭ (koṭṭeti), ṭṭh (oṭṭha), ḍḍ (oḍḍeti), ḍḍh (oḍḍha), ṇḍ (soṇḍa), ṇṇ (roṇṇa)/ tt (anottappa), tth (soṭṭhi), tr (gotrabhū), dd (lodda), ḍḍh (boḍḍhum), nt (honti), nn (\*jambonnada)/ pp (soppa), pph (goppaka), bb (yobbana), bbh (akkhobbha), mbh (sombhā)/ ly (piṇḍolya), ll (\*molla), ss (appossuka)

11) B<sup>o</sup>, Rūp. p. 4<sup>24-25</sup>; E<sup>o</sup>, Sad. p. 608<sup>20-21</sup>.

12) W. Geiger: *Pāli Literatur und Sprache* § 5~8, O. Franke: *Pāli und Sanskrit*, S. 90. この Morengesatz については再考の余地があるが、今は従来の説による。cf. Sad. § 4~6; Rūp. § 4.

複合子音の前にある e, o は短母音となり長母音とならない、という点のみが主張されて、語と語との間の e, o については考慮されていないと。従つて、語間の e, o については、反論例からも知られる如く、少くとも、e-tv, のように e, o の後に子音半母音の saṃyaga を伴う場合、及び、o-'mh のように母音連声の場合等には、その限りではないという条件が附加されねばならないであろう<sup>13)</sup>。このように、Mog の定義には条件的な、不明瞭な要素が存在するが、これが後世に広く支持を得られなかつた第一の原因であろうと思う。

更に又、ē, ō を ē, o と区別して母音に含めるかどうかということになれば当然開音節 (open syllable) の場合が問題となるのであるが、最近の研究によれば、パーリ語の gāthā には ē, ō は存在するが、o はともかくとして、e は長音であることが認められており<sup>14)</sup>、又、仏教梵語に於ても ē, ō は確認されているが<sup>15)</sup>、それも metrically であつて本来的なものではない。これを考えてみても、Mog が伝統説を修正して迄 ē, ō を設定したことに果してどれ程の意味があつたかは、疑問である。却つて従來の定義を複雑化させたのではないかとさえ考えられよう。ブ拉克リットに於ても、e, o は複合子音の前で短音化するが<sup>16)</sup>、これを以つて短母音と見ることはないのであつて、パーリ語では Kac を初めとする Sad, Rūp に於ける e, o の扱いが妥当であるように思われる。Mog による ē, ō 設定の動機として、Sinhalese には ē, ō の区別があるという事実を指摘することが出来るかも知れないが、パーリ語に於ては、Mog の言う ē, ō は、初心者者の為 (bālānam upakārattham) のものであり、現行のパーリ語文法<sup>17)</sup>にも見られる便宜的な (for the convenience of the learner) 短音と考えるべきであつて、八母音と同値に扱うことは出来ないであろう。

13) 既に引用されたものの外に、前者の例としては、te vyasanam (J. I. 256<sup>7)</sup>, te tyamha (J. VI. 322<sup>25)</sup>, kiso tvaṃ (Sn. 426), nihato tvaṃ (Thig. 142) 等が、後者の例としては、paṭipanno 'smi (J. V. 260<sup>14)</sup>, buddho 'smi (Thag. 830), no 'mhi (Sn. 455) 等が gāthā 中に頻出している。sallape brahmacārinā (J. V. 208<sup>10)</sup>, bho brā : hmaṇā (Sn. 457) などについては、別に考える必要があろう。

14) A. K. Warder: *Pali Metre* § 34~35.

15) F. Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, 3. 64; 65; 74.

16) R. Pischel: *Grammatik der Prakrit-Sprachen* § 84.

17) Sumaṅgala Sūriyagoḍa: *A Graduated Pali Course*, I, pp. 1~2.